



Title	堂本印象による襖絵における抽象表現：西芳寺西来堂を中心に
Author(s)	山田, 由希代
Citation	デザイン理論. 2011, 57, p. 136-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53442
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

堂本印象による襖絵における抽象表現

— 西芳寺西来堂を中心に —

山田由希代／京都府立堂本印象美術館

はじめに

大正、昭和の京都画壇で活躍した堂本印象は、近現代の画家としては比類ない襖絵の数々を歴史的な寺院に残した。1960年代以降、襖絵に抽象表現を用いたことは、障壁画の歴史における画期的な取り組みであり、注目すべきことである。しかし、寺院の襖絵には、花鳥画や水墨画であるという強いイメージが一般に定着しているためか、印象の取り組みはこれまで具体的に検証される機会がなかった。したがって、印象の抽象の襖絵は、これまで看過される傾向にあった¹。

本発表では、印象の襖絵の抽象表現にみられる日本美術の伝統的技法を手がかりに、印象の襖絵制作の斬新な試みについて考察する。

1. 新たな日本画を目指して

戦前の印象は、花鳥画や風景画、仏画などを描いて画壇に確固たる地位を築いていたが、戦後は現代女性をテーマにし、その後、画風を抽象へと転じて美術界に反響をよんだ。それまで印象が着実に構築してきた表現と決別し、制作の機軸を抽象へ移した意図には、真の伝統とは、伝統を打ち破って新たな芸術の創造を目指すことである、という点にあった²。このように創造された抽象作品を印象は自ら「新造形」と名づけた。そして、1960年代以降、襖絵制作についても抽象表現に限ることになる。

印象の抽象表現には、しばしばアンフォルメルの影響が指摘される。1950年代にフランスで起こった前衛芸術の一動向であるアンフォルメルを主導した美術批評家ミシェル・

タピエは、印象を日本の伝統を持ち合わせながら前衛的な芸術家とみなし、イタリアでの個展を開くよう招いた。そこで、東洋の書にも通じる筆の線を中心に、色彩や金箔が織り成す装飾性に富んだ印象作品は、大きな関心をよんだ。印象の抽象作品の特徴は、油彩には見られない顔料の調子、手法、屏風などの形態といった日本画特有の素材が巧みに利用された独自の表現にあった。なかでも、西洋には存在しない墨色の変化、金銀の使用、岩絵具の重厚さ、余白による画面上の余韻といった画境は注目された。新たな表現を模索していた印象は、この出展によって、墨の動きを全面に出したカリグラフィックな表現である「新造形」に確信を得た。

2. 寺院空間への挑戦

印象が独自の抽象表現を襖絵にもたらした背景には、前述の海外展での経験が強く関係していた。印象は構図と色彩の組み合わせによる装飾的な抽象様式を独自の表現として生み出し、それによって襖絵を制作した。これらは、表現的には新しい試みであったが、落款は日本画の形式を用いて伝統を継承したといえる。

戦前に印象が描いた襖絵は、水墨を基調とした花鳥などのモチーフであったが、1958（昭和33）年の智積院宸殿に描かれた襖絵のテーマには新しい傾向が見られる。金地に鮮やかな色彩で描かれた《婦女喫茶》には、襖絵のモチーフとしては前代未聞の洋服姿の女性が描かれた。この発想は、襖絵の歴史でも画期的な試みであったが、このようなテーマ

が用いられた背景には、智積院にある長谷川等伯一派による豪華な桃山時代の襖絵が誘因であると考えられる。さらに、1963（昭和38）年の竹林寺襖絵は、完全な抽象で描かれた最初のものであるが、重要なことは、それには近世以降の日本美術の系譜を象徴する《風神》《雷神》というテーマが用いられているところにある。

その後、印象は、仏教の世界観という概念自体をテーマとするようになる。仏教観念に基づく独自のテーマを設定し、それを寺院の襖絵に適合させるようになったのである。仏教観念を表出するために抽象を用いるという試みは、これまでの寺院の襖絵にはみられなかった。西芳寺の襖絵は、その発想が展開されたものである。

3. 西芳寺西来堂の襖絵について

西芳寺の本堂である西来堂を飾る襖絵は、全て印象独自の抽象表現で飾られ、その総数は104面に及ぶ。各部屋は《遍界芳彩》《無機》《普寧》《觀義》《押音充光》《超玄》《夢窓慈惠》という7つの画題から構成されている。

堂内は、室中の《遍界芳彩》の間と他の間に大別される。襖絵に注目すると、極楽浄土を表すといわれる《遍界芳彩》は、金地に赤、黄、緑、白、紫、黒の色が組み合わされたモザイク状の表現であり、きらびやかな空間を生みだしている。これに対して、それ以外の画題は、水墨を用いて描かれ、夢窓国師や悟りに由来する宗教的な現象を想起させる。墨で力強くのびやかに引かれた流線は、部屋の空間的広がりを感じさせる。部分的に施された金色が、墨線とあいまってモノクロの中に装飾性を高めている。室中の華やかな《遍界芳彩》のまわりに水墨を基調とした襖絵を配することで、堂内空間における強弱が明確に

区別されている。印象は、墨と対比的に金を使うことで、金のきらびやかさを強調した。また、このような襖絵表現は、特別な視覚的効果を発する。外光によって、中央部分の強い金色と同時に、周りの部屋の金色部分がところどころ光を放つ瞬間には、寺院の莊嚴さを感じ得することができる。

金色と同様に、意図的に多用した墨は、印象にとって、海外作家たちの関心を引いた日本的な要素であった。大正期以来、日本画家として墨の経験を積んでいた印象は、水墨画特有の表現技法「にじみ」や「ぼかし」、「かすれ」を積極的にとり入れた。また、墨の濃淡を組み合わせることで、画面に三次元的空间と同時に力強さや大胆さを生みだした。こうして、新たな表現を目指す一方で、室町時代以来の墨一色で立体感や躍動感を表す水墨画に則して独自の表現を創造した。このような表現は、印象が最後に手がけた法然院方丈および客殿の望西閣の襖絵にも共通して見られる。

おわりに

西芳寺西来堂の襖絵では、宗教的な概念をテーマに、墨と金を駆使する伝統的な技法で印象独自の装飾世界が生みだされた。印象は、日本美術の伝統に根ざしながらも、刷新的な表現を考案した。1950年代末から60年代に印象が試みた寺院空間における抽象表現は、襖絵の新たな創造の可能性を示した実例として意義あるものといえよう。

1 土金康子氏によって、制作背景という観点から印象の襖絵研究が行われ、作家の活動が明らかにされつつある。Yasuko Tsuchikane『Domoto Insho (1891-1975) and Buddhist Temple Art in Twentieth Century Japan』The degree of Doctor of Philosophy in the Graduate School of Arts and Sciences Columbia University 2009

2 堂本印象「新しき抽象画への諦感」1959年